

# K. マンスフィールドの故郷への想い

## —「ニュージーランドもの」における祖母像—

寺 本 明 子\*

(平成 20 年 5 月 23 日受付/平成 20 年 9 月 2 日受理)

要約: キャサリン・マンスフィールド (Katherine MANSFIELD 1888-1923) は, 19 歳で祖国ニュージーランドを離れ, 二度と戻ることは無かった。彼女にとって, イギリスで作家になることが人生の最大の目的で, その為に故郷は切り捨てられたのである。しかし, 第一次世界大戦に際し, 英国軍に入隊する為に来英した弟との再会により, 故郷での幸せな子供時代の記憶が彼女に甦った。その弟の不慮の事故死により, 彼女は, 自分の使命はニュージーランドについての作品を書くことだと考えたのだが, この様な動機から生まれた短編小説群が, いわゆる「ニュージーランドもの」である。

マンスフィールドの作品の中には, 祖母と孫の関係が描かれたものがいくつかある。彼女の日記や伝記から, 祖母のことが大好きだったことがよく知られており, その事実が作品に反映されていると考えられる。また, 作品中のバーネル (Burnell) 一家は, マンスフィールド自身の家族ビーチャム (BEAUCHAMP) 一家と構成が似ており, 子供の頃の彼女自身, 祖母, 両親, 姉妹を彷彿とさせ, 叔父, 叔母, 従兄弟達との交流も描かれる。そして, 作品中には, 人間関係だけでなく, 人間性へも向けられる彼女の鋭い洞察が見られる。

作品に登場する「祖母」は, 孫との関わり方により様々に描かれるが, 皆, 心温かい女性である。その祖母像を, 「新しい服」('New Dresses') における第一段階, 「船旅」('The Voyage') の第二段階, そして, 「前奏曲」('Prelude') 「入り江にて」('At the Bay') の第三段階に分けて検証し, その違いや共通点を分析する。

キーワード: ニュージーランドもの, 家族, 祖母, 孤独, 抒情性

## I. 初 め に

他国に先駆けて産業革命を成し遂げ, 「パックス・ブリタニカ (Pax Britannica)」を世界に誇示していた英国も, 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて, 順次, 追隨してきたドイツやフランス, アメリカ, 更に, 南下政策を進めるロシア, それにイタリアやハプスブルグ家以来の大国オーストリアなど, 自国の原料供給地と工業生産品の市場を求めて, 植民地拡大に躍起になっていた国々との利害衝突を回避する手立てが見出せないでいた。第一次世界大戦前夜のことである。不穏なこの時代に, 理想を胸に懐き遥か彼方の故郷ニュージーランドを後にして, 憧れのロンドンに来ていたキャサリン・マンスフィールド (Katherine MANSFIELD 1888-1923) であったが, 弟レズリー・ビーチャム (Leslie BEAUCHAMP) が英国軍に入隊すべくイギリスにやって来て, 数年ぶりに再会した姉弟 2 人に故郷ニュージーランドの懐かしい思い出話が尽きなかったことは想像に難くない。その弟が数ヶ月後, 戦時の訓練中に爆弾が炸裂し, 亡くなるという不幸に見舞われる。そのやるせない悲しみを乗り越えるには, 何一つ不自由なく幸福に過ごしたニュージーランドの思い出を文章に残すしかない。それが弟を思う自分の責任であり, 使命であると彼女は考えた: ——

Now—now I want to write recollections of my own

country. Yes, I want to write about my own country till I simply exhaust my store.... Ah, the people—the people we loved there—..., too, I want to write. Another 'debt of love'<sup>1)</sup>.

一連の「ニュージーランドもの」と呼ばれる作品群が, その結晶である。そこに見られる特徴の一つは, マンスフィールドの, 祖母への特別な想いであろう。1909 年 7 月 4 日の日記には, 「祖母」('The Grandmother') というタイトルの詩が書かれ, 祖母と自分とまだ幼い弟が桜の木の下で過ごす幸せな一時を描いている: Underneath the cherry trees/The grandmother in her lilac printed gown/Carried Little Brother in her arms./A wind, no older than Little Brother,/Shook the branches of the cherry trees/So that the blossom snowed on her hair/And on her faded lilac gown/And all over Little Brother....<sup>2)</sup>

1916 年 2 月 16 日の日記では, 「前奏曲」('Prelude') の前身である『アロエ』(The Aloe) の最終章に, 木の下で祖母に抱かれる生まれたての弟の素晴らしい美しさなどについて書くつもりだという記述<sup>3)</sup>も見られ, 彼女の幼少期の温かい思い出には, 仲の良かった弟と並んで, 大好きだった祖母も大切な存在であることがわかる。

ニュージーランドものには, マンスフィールドの家族構成や家庭の雰囲気やを彷彿とさせるものがある。特にバーネ

\* 東京農業大学応用生物科学部教養分野

ル (Burnell) 一家は、キザイア (Kezia) を中心として見ると、祖母、両親、姉妹、弟があり、更に、叔母、叔父、従兄弟達も登場して世界を広げる。登場人物達の名前も、実際のものがかなり織り込まれていることに驚かされる。キザイア (Kezia) はキャス (Kass: キャサリンが変形したマンスフィールド自身の呼び名) と音が似ている。パーネルは、母親アニー・パーネル・ダイヤー・ビーチャム (Annie Burnell Dyer BEAUCHAMP) のミドルネームであるし、スタンリー (Stanley) は、父ハロルド・ビーチャム (Harold BEAUCHAMP) の母親の旧姓である。作品中の祖母のフェアフィールド夫人 (Mrs. Fairfield) の姓は BEAUCHAMP の英語形、ベリルおばさん (Aunt Beryl) はベルおばさん (Aunt Belle) から来ている。ロッティ (Lottie) もパット (Pat) も身近なところに実際の人達の名前だ<sup>4)</sup>。こうした事実からも、いかに彼女が故郷を描くことに心を砕いたかが理解できる。マンスフィールドは、短い生涯において様々な短編小説を残したが、「イギリス小説においてほとんど比を見ない程に、自己の経験をその物語に織り込んで」おり、「最も創造や空想を用いていると思われる場合でさえ、自分に直接起きなかった事柄については何も書かなかった」<sup>5)</sup>と言われる程で、ニュージーランドものに正に彼女が本領を発揮していると言えるだろう。

しかし、日常生活の一場面を切り取って、人間の深層心理を描くことが得意であった彼女のことである。単なる思ひ出話を書いた訳ではない。そこには、総ての人間に通じる人の心の機微が描かれる。「単なる地域性を越え、その正確な背景描写は、よりの確な人生描写の一要素に過ぎない」<sup>6)</sup> のであり、「彼女は象徴主義の作家 (a Symbolist writer) で、社会的な事情や現実ではなく、現実の中に隠れた理想の想像上の発見や楽しみに興味を覚えた」<sup>7)</sup> のだと言える。

そうしたことを踏まえた上で、実生活でも関係の深かった祖母が作品の中でどのように扱われているかを検証してみたい。実在の祖母の名前は、マーガレット・マンスフィールド・ダイヤー (Margaret Mansfield DYER) と言い、病身の母親に代わって、家族の面倒をよくみたと言われている。彼女は、控えめで機転が利き、实际的で良識があり、自分の子供9人を育てた後、娘の家の5人の子供達も育て、使用人や独身の娘達の助けを得て、13年余り家の切り盛りをした<sup>8)</sup>。作品中の「祖母」は「老女」とはニュアンスが違い、守るべき者を持つ慈愛溢れる存在としていつも描かれている。ここに作者の幼い時の経験が無意識のうちに織り込まれていると言えよう: ‘...one of the most notable features of Katherine Mansfield’s typical portrayal of family politics is that she adds to the usual configuration of mother, father and child, a fourth element in the figure of the grandmother’<sup>9)</sup>。

その祖母の人物像の諸相を追って見ていく為に、まず、「新しい服」(‘New Dresses’) の第一段階、「船旅」(‘The Voyage’) の第二段階、人物像に厚みと複雑さが出ている「前奏曲」(‘Prelude’), 「入り江にて」(‘At the Bay’) の第三段階へと進めていく。

## II. 「新しい服」(1912)

「新しい服」は、「船旅」を除いた他の作品と共通する「孫と同居している祖母」の話である。ところが、祖母の具体的な名前は示されていない。祖母は、「カーズフィールド夫人 (Mrs. Carsfield) の母親」として登場する。その為、登場人物としての祖母の印象がやや薄い。この祖母は、孫娘ヘレン (Helen) のことで、娘夫婦と意見が合わない。ヘレンは、いつも洋服を汚すし、どもりながら話すので、両親は他の子供と差別する態度をとる。他方、長女のローズ (Rose) は娘夫婦の自慢の種だし、長男には殊更に愛情を傾けている。まだ幼い長男の、テーブルの前板をスプーンで叩いて大きな音を立て続けるなどの無作法な行動も、両親の賞賛の対象となり、叩くのが5分間も続くと、力が付いたと喜んでいる。

祖母は、両親に日頃、邪険にされる孫娘をひたすら庇おうとする。

老母はアン (Anne: ヘレンの母親) がなぜこんな風にヘレンに辛く当たるのかしらと思った—ヘンリー (Henry: 父親) もやはりそうだ。彼らはヘレンの気持ちを傷つけたがっているみたいだ。(p. 26)

そして、ヘレンがどもることについて、祖母は娘に向かって「あなたも小さい頃はどもっていたわよ」と指摘し、この祖母の言葉を通してマンスフィールドは、アン of ‘unwanted and unresolved identification with her rebellious daughter’<sup>10)</sup> を見せている。娘夫婦のやり方について、心の中で、或いは、遠回しに口に出して自分の意見を表わす祖母は、他の4作品には見られない。そして、娘の方も、「孫ヘレンに対する祖母の敏感な反応の仕方」に心の中で秘かに不満を感じている。こうした状況で、祖母がひたすらヘレンを守る大きな存在になると期待されるのだが、実を言うと、それも何となく頼りなく、両親がヘレンを差別する様な扱い方をすることについて、一度はっきりと自分の考えを言おうと考えるにもかかわらず、祖母は食堂の時計の音が耳について考えがまとまらず、ただぼかんと坐っているとといった按配である。

「新しい服」が祖母を扱う他の作品と違う別な点は、祖母が自分の娘に家事の指図をされていることである。娘の夫ヘンリーの帰宅が近づくと、祖母は夜食の準備を具体的に指示される。自分から娘の手助けをしている他の祖母達とは違って、この作品の祖母は家庭内での立場が弱い。

注目すべきは、これらの大人3人が、両親対祖母という簡単な対立関係には収まらない点である。もちろん、ヘレンへの対応については概ね上述の図式が見られるが、新しい洋服を自分の娘達に仕立てることについては、無駄遣いだと考える父親と、娘達 (特に長女) を飾りたい母親との間に意見の違いが見られる。一緒に縫い物をしていた祖母は「高い方の生地にしてよかったね」と理解を示し、ここでは、素敵な服ができた喜びを女性2人で分かち合っている。この家では母親が父親に一方的に経済的に支配されており、父親は、他の作品の父親達同様、数字に細かい。まず生地の値段が高額であることについて「1ヤール5シリ



ングの緑のカシミヤを7ヤール—計<sup>35</sup>シリング」と数字を挙げて妻を激しく非難する。一方、母親は、洋服の価値について、2年も着られて、その後丈を延ばして染めれば通学用になるといった計算をしており、夫とは全く違う思考回路であることがわかる。

教会に出掛ける朝、祖母の世話で孫娘達が新しい服に身を包み、両親のいる部屋に現れる。すると、これらの新しい服は母親の虚栄心を満足させる為のものと判明する。特に彼女は着飾った長女のローズに惚れ惚れする。他方、ヘレンに対しては、全く無視してしまう始末である。教会からの帰り道、昼食会に招かれたマルコム医師 (Doctor Malcolm) は、ヘレンの気性の良さを認める一方で、ローズは高慢な気質であることを見抜いている。医師に、新しい服がとても好きだと言うヘレンだが、家族への反抗的な言葉も打ち明けた後、なんとブランコから飛び降りる時にスカートを破いてしまう。ここで、ヘレンが自分の不注意を叱責される「恐怖も後悔も感じなかった」のは、その後の作品に描かれる心優しい、そして祖母と気持ちの通じ合う孫達と異なる。ヘレンは破れた洋服を通学鞆の中に隠し、家の中を覗き見していた変な男が盗んで行ったという作り話を平気でし、更に夕方になるとこの事件のことに全く無頓着な態度をとる。この洋服の事件で心を痛めるアンの泣きを見て、夫ヘンリーはその態度を「満足」に思うし、父親にひどく叱られながらも、「ローズに足の爪で足を引っかかれた」と言うヘレンの言葉に反応し、祖母は「次の土曜にローズの足の爪を切ることにしましょう」という見当はずれな庇い方しかできない。子供達、両親、祖母のそれぞれが別々の思惑の言動をしており、家族内での絆、心の通い合いというものがあまり感じられないと思えたりする。そしてそれは、マンスフィールド自身が家族への反発を感じていた頃の、初期の作品であることの表われでもある。

しかし、マルコム医師の機転で発見された服が破れ目を修理され、こっそり自分の元に戻って来たことに祖母が安堵を見せる場面に、彼女が孫のヘレンに抱く愛着が見える。娘夫婦の子育ての態度の違いに表面的には干渉しようとしないう祖母の心遣いがあるという見方もできる。「老母」と形容され、祖母というよりも「老いた母」としての立場がむしろ強調され、幾分曖昧な姿に読者には映るが、老いた者の常として、家庭内での自分の立場を考慮して決して前面には出ないが、にもかかわらず、どことなく頼れる存在としての祖母の姿がこの作品に窺える。

ここで、祖母と孫を扱う作品として、ロンドンものから「パーカーおばあさんの生涯」(‘Life of Ma Parker’)にも触れたい。作家の世話をする家政婦として働くパーカーおばあさんは、可愛がっていた孫息子レニー (Lennie) の葬儀を終えて仕事に復帰したばかりである。家政婦の仕事をしながら、作家との会話と絡めて、孫息子との触れ合いやその病との闘いを思い出す構成となっている。時制が過去・現在を行き来し、同じ頃書かれた「亡き大佐の娘達」(‘The Daughters of the Late Colonel’) に似たフラッシュ

バックの手法を使っている。どちらも、「自分にとってかけがえの無い総て」とも言える大切な人を亡くした為に、心が混乱し、回想が現実の生活に混入している。しかし、孫が病弱であったことと、娘エセル (Ethel) の存在感が薄いことから、パーカーおばあさんには、娘を助ける母親、孫を守る祖母としての姿よりも、孤独で誰にも頼れない老女のイメージが強いと言える。

孫のレニーは、元々体が弱かった。体重が増えるという治療法を試したり、墓地に連れて行ったり、バスに乗せてみたり、孫が元気になる為に役立ちそうなことは総て試したが、その甲斐なく幼い命に先立たれてしまった。もう立ち直れそうにも無いショックを受けてパーカーおばあさんは悲しんでいる。

しかし、レニーの死に先立って、パーカーおばあさんは子供を7人も既に亡くしている。それだけでなく、パン屋だった夫の肺病、手伝いに来た義妹の大怪我、成長した子供達の裏切り、レニーの父親の死、と辛く悲しいことが彼女の人生には詰まっている。レニーとの触れ合いの楽しい記憶と、それゆえ殊更悲しい別れも、あまりに不幸に満ちた人生の一コマと捉えられよう。これまで我慢強く、人の助けも求めず涙も見せず、「いつも誇りに満ちた顔」を見せて来た彼女も、ついに今度ばかりは悲しみに打ちのめされ、人に見られず迷惑を掛けずに泣く場所を求めてさまようところで作品は終わる。寂寥感そのものである。「今度ばかりは」ショックが大き過ぎる、と見える彼女であるが、しかし、これまでの経験からすると、そのどん底から何とか立ち上がれるのではないかという希望も読者に感じさせる。これまで乗り越えて来た悲しみも、その度毎に、その時はもう立ち直れない限界と感じさせるものだったが、何とか乗り越えて来た。とすれば、再び涙を隠して生きていく力が取り戻せる暗示が漂っている。また、雇い主としてパーカーおばあさんに細かく目を光らせ、薄給で働かせる作家に対して、逆に彼だって「この様に汚れた部屋に住むなんて哀れだ」と同情する心の余裕と柔軟な発想と心優しいさがあることから考えても、彼女は立ち直るきっかけを掴めると思われる。長く生きながらえるうちに、身内の何人にも先立たれて、その度毎に精神的にどん底に突き落とされ、やるせない思いの老婆の姿がそこはかとなく漂う。それにもかかわらず、ただひたすら耐えて、生きようとする姿が作品から浮かび上がってくる。

### III. 「船旅」(1921)

「船旅」では、祖母と孫娘の船旅を通して、導く者と導かれる者、守る者と守られる者の組み合わせがはっきりする。数日前、母親を亡くした少女が、祖父母のところに預けられることになり、父親に見送られ、夜中の11時半に出航する船に乗り込み、祖母に連れられて祖父母の家へと向かう。船の上で、祖母と孫の2人の触れ合いが展開されるが、祖母の名前は作品中の会話でわずかに明かされるだけで、ほとんど「おばあちゃん」(grandma) という表現で登場する。作品を素材のレベルから見ると、孫と祖母の関わりの作品であるが、根本的なテーマは少女の life-voyage

(人生の船旅)であろう。

見送りの父親は、他の父親と同じく、「(船が出るまで)あと3分あります」と数字に細かい。その一方で、「いつまで(祖父母の家に)いなければいけないの」という娘の質問には答えず、「考えておくよ」と答えるのみである。

「新しい服」のヘレンと、この孫娘フェネラ(Fenella)が違うのは、親に愛されている子供であるということである。別れの波止場で、フェネラの父親は、きっぱりした口調の中にも、疲れて悲しげな表情を見せる。そして、フェネラと亡くなった母親の関係には触れられていないが、祖母が「お前のお母さんが私に編んでくれた毛糸の頭巾をかぶりましょう」と話すことから、夫の母親に優しくする人なら、娘にも愛情を注いでいたに違いないということが容易に想像できる。

祖母はフェネラに様々なことを教える。その象徴の1つが、白鳥の首がついた傘である。マンスフィールドはこの象徴を巧みに使っているが、後で扱う「前奏曲」でも、祖母から孫娘へと引き継がれる象徴(ランプ)が姿を見せる。この「船旅」で、祖母の傘はフェネラに託され、階段の手擦りに引っ掛けて壊さないようにと注意される。途中で急な階段を下りる時に、傘の存在を忘れてしまったフェネラであったが、その後はしっかりと荷物と一緒に抱きかかえ、夜、船が揺れた時には、寝椅子に立てかけたままであることを思い出し、傘が倒れて壊れるのではないかと心配する。祖母から教えられたこと(傘を守ること)が心に留められるということである。結局祖母も同時に思い出し、船室係が部屋にきた時に傘を横にしてもらい、傘に象徴される2人の大切な絆は守られた。この傘は、フェネラを守るように祖父の家に着くまでずっと共に旅をして、祖父のベッドの手擦りに掛けて旅の完成を示す。この、傘を守り通すという行為を通して、フェネラが祖父母の家での生活に溶け込む予感が感じられる。

フェネラが祖母に導かれる様子を時間的推移に従って見ていきたい。祖母は、妻を亡くした息子との悲しみに満ちた別れを経て船に乗ると、孫娘を無事に連れて帰る使命に専念し、孫には悲しみを見せない気丈夫さを持つ。そして、死の現実を受け入れ、「船室を見に行きましょう」と一歩を踏み出す軽快さは‘restoring the familiar patterns of life’<sup>11)</sup>であるとの指摘があるが、この‘pattern’と祖母の関係について、マーヴィン・マガラナー(Marvin MAGALANAR)も「前奏曲」と「入り江にて」の中のフェアフィールド夫人を、編み物や家事において‘pattern’を用いる‘the patterner of life’であると分析している<sup>12)</sup>。船の上で見つけたサンドイッチを買おうと一瞬思ったものの、その高い金額に祖母は驚く。ボーイが子供連れ老人のその様子を見て小馬鹿にした様だったが、祖母は恥ずかしそうな驚いた顔(a small, astonished face)をしたものの、卑屈にならずに、胸を張って通り過ぎた。そして、顔なじみの優しい女性の船室係とは心許して言葉を交わす気安さを持っている。更に、船の中の、箱のように狭い船室で洋服を脱いで寝支度をするに戸惑うフェネラの前で、祖母はさっさと着替えを済ませ、何でも無いことのように見せ、孫娘を

元気付ける。「私は旅慣れているから寝台の上の段に休みますよ」というさりげない言葉も、そのような思いやりの延長であると捉えることができる。

また、この祖母が船室係に向かって口にする「神様の思し召しですよ」という言葉は、それとなく孫に伝えるものであると同時に、自分の死期を意識しているマンスフィールドが自分自身に言い聞かせているかの様である。同時にそれは、祖母が息子の嫁を亡くした悲しみに打ち勝とうとする姿であるというよりも、人は誰もこの世の出来事を、総て受け入れる姿勢が大切であると述べていると受け取れる。孫に対して直接言うのではないとしても、「言葉にした教え」で影響を与えているという点で、他の作品に登場する祖母とは異なっている。

やがて船の旅も終わり、朝早く「貝殻の様な」家に着いた。貝殻のイメージから、その小ささとひっそり暮らす老夫婦の生活が想像される。白い小石を敷いた小道、祖母の好きな白い花、白い猫という色彩の中に、ドアの脇の赤い如雨露が色を添え、静かながらも温かい暮らしが垣間見える。早朝の到着だった為、フェネラは、ベッドに横たわった祖父と対面する。優しく微笑む祖父のベッドの上にかかった額縁に、彼女は祖母の言葉を見る。

「落し物。金でできた一時間

60のダイヤモンドの分がちりばめられています。

礼金はありません

二度と戻りませんから。」(p. 533)

松原知子は、この言葉を、フェネラの輝く子供時代の終わりを告げる厳しいものと解釈している<sup>13)</sup>。しかし、私はこの「礼金はありません。二度と戻りませんから」という言葉に、前向きに生きる祖母の姿を見る。輝かしい時は返って来ない。それだけに、大切なものであるが、振り返っているばかりではなく、これからまた作り出すという心意気も言外に漂っている様に思われる。船がビクトンに近づき、未明の甲板に出たフェネラは寒さに震えて、‘Oh, it had all been so sad lately. Was it going to change?’(p. 531)と思うのだったが、その問いに対する答えはここにある。これからのフェネラの生活にこの祖母の教えが浸透することは間違いない。なぜなら、フェネラは祖母の傘を大切に引き受けて運んで来たように、その教えを受け入れようとする柔軟さがあるからである。

#### IV. 「前奏曲」(1917)

この物語に登場する家族は、様々な構成員から成る。まず、スタンリーとリンダ(Linda)夫婦。2人の関係はと言うと、夫が激しく妻を愛するあまり、体が弱く繊細な彼女は、彼を尊敬する一方で、恐れている。この夫婦の3人娘達は、まだ幼いとは言え、それぞれの個性を備えている。一番上のイザベル(Isabel)は女王気取り、妹達の面倒を見るところか、彼女等を自分の好きな様に従えようとし、自慢屋でもある。次女キザイアは、人の意見に流されず、判断力があり、自立心が旺盛である。一番下のロツティは、どちらかというとイザベルの家来であり、寝室や食事の席でもいつも同一行動をとる。この家族の同居人は他に、リン



ダの母親である年老いたフェアフィールド夫人とリンダの妹ベリルがいる。フェアフィールド夫人は、病気がちな娘に代わって家の切り盛りをし、食事の支度から子供達世話までの家事一切を引き受けており、「頼れる祖母」のイメージが作品中に見られる。ベリルは、結婚を夢見る独身女性で、広い世界に憧れ、都会から離れた所に家族で引っ越したことを残念がる。他に、子供達の従兄弟ピップ (Pip) とラッグズ (Rags) も登場し、5人の子供社会が生き生きと描写されているだけでなく、少女達の世界が男の子との交わりで広がる相乗効果を持っている。

作品は、一家の引越しという出来事から始まり、キザイアとロッチェが馬車に乗り切れずに置いて行かれることになる。リンダは自分のことで精一杯、彼女が言う「絶対に必要なもの」の中にはこの下2人の娘は含まれない。リンダは子供を‘a lump of child’と表現し、「捨てて行く」と言って、小さな笑いを漏らす。芝生には後から運ばれるテーブルやいすが逆立ちして置かれているが、この家具が逆立ちした‘absurd’な状況は、大切な子供達よりも他の荷物が優先して運ばれる、言い換えれば子供達が母親の愛情を受けられないという奇妙な状況を暗示しているのかも知れない。この一家には何か風変わりなところがあると、冒頭で読者は気付く。

この家族の中では、似たもの同士がペアを作っている。まずスタンリーと義妹のベリルは、一緒に食事をとったりゲームをしたりして、2人でいることが多い。スタンリーは、「君 (ベリル) と私だけが、この家じゃ食べ物に対して本当の感覚を持っている人間だ」と言い、妻リンダの食欲の無さには理解を示さない。長女のイザベルはその支配欲の点で従兄弟ピップと似ている。子供達で遊ぶ時には、この2人が父親と母親になっての家族ごっこや、医者と看護婦になっての病院ごっこを提案し、2人が好きな様に下の子供達の役柄や行動を決めるので妹達や弟の不評を買う。ロッチェとラッグズも似ている。2人とも単独行動ができず、それぞれイザベルとピップの後をついて歩く。次女のキザイアはと言うと、祖母のフェアフィールド夫人との類似点が見られる。最初の場面で馬車に乗れず置いて行かれた時、ロッチェは母と祖母を呼んで泣き声をあげたのだが、キザイアは「もう一度おばあちゃんにお別れのキスをする」と言って馬車の後を追って行った。ぶどうと一緒に買いに行ったり、可愛い工作をしてプレゼントしたり、同じ寝室で寝たり、キザイアは祖母と多くの行動を共にしているだけでなく、感性も似ている。寝室で祖母は入れ歯をはずして、他の誰にも見せないありのままの姿をキザイアに見せるが、この場面は、「船旅」の船室で、祖母の寝巻き姿を初めて見るフェネラを思い出させるものがある。

母リンダに代わって一家を取り仕切る祖母フェアフィールド夫人は、この家族の中心的存在であると言える。彼女がいなければ家族はまとまらない。ファーストネームが明かされず、‘Mrs. Fairfield’の呼称で呼ばれ、祖母となった今でも‘keeper of the house’が彼女の唯一のアイデンティティーであることを示している<sup>14)</sup>。そして、譬えて言うなら、その姿は闇を照らすランプである。新しい家に、

夜になってやっとキザイアとロッチェが到着した時に、「不思議な美しい興奮がその建物から震える小波となって流れ出るように見えた」のは、窓から明かりが漏れていたからである。その一つは下の部屋の暖炉の火だったが、別の一つは、家の中を巡っているランプの明かりであった。この、ランプを持って家の中の一部屋一部屋に生気を吹き込んでいるかのような動きをしていたのが、他でもないフェアフィールド夫人であった。ランプは「人形の家」(‘The Doll’s House’) でもそうである様に、人の心に灯を点すという意味を持つ。目立たないが、むしろ、目立たないからこそ大切に心に留めるべき喜びである。そして、このランプは、キザイアに引き継がれる。眠くてふらふらしている三女ロッチェを抱いて運ぶ為に、祖母は彼女にランプを託したのである。ここで興味深いのは、自分の母親の心優しい穏やかな生き方に対して反発を見せるベリルが「ランプを下に置きなさい、家が火事になってしまうから」と姪キザイアに言い放つ姿である。

次に、フェアフィールド夫人は、子育てや夫との関わりに恐れを抱くリンダを絶えず庇い、保護する役目を担っていることが挙げられる。フェアフィールド夫人のお陰で、体が弱いリンダはいつまでも「娘」でいることができる。引越しの馬車の場面でも、祖母は孫のキザイアが最後に走って追いかけて来る姿にも気付かず、具合の悪いリンダに何かを渡そうとバッグの中で探していた。いつも自分の娘リンダを気遣い、年老いても「母親」としての気配りを惜しまない。アロエのたもとで2人は母と娘の関係に戻って語り合う。そして、母親の「今年はきっと花が咲くわ。あの上のところをご覧なさい。誓でしょう」という言葉を受けて、「きっとあれは誓だわ」とリンダも言う。この時リンダは、アロエの船に乗って、1人でどこまでも行ってしまふ幻想を抱く。「前奏曲」の前身の『アロエ』では、リンダの空想の中でアロエの船に乗るのはリンダと母親の2人であったが、マンスフィールドは書き直すに当たって、リンダの孤独感を強める様にして、1人の旅としたのであろう。リンダは、妹ベリルと違って、母親が好きで、「葉の茂る窓を背にした母の姿をこの上なく美しいと思った。母の姿を見ていると何か心の慰められるものがあって、その慰め無しにはとても生きられないという気がリンダにはした。母の体の甘い匂い、その頬の柔らかな感触が彼女には必要」(p. 238)なのである。そして、母の髪、手、指輪など総てに感嘆する。母親、妻としての自分の立場に恐れを抱くリンダは、この様な母と一緒にいる時が一番心安らぐのだ。いつまでも「娘」でいたいという気持ちは、彼女が時々父親との思い出に浸ることにも関係している。

第三番目の特徴として、フェアフィールド夫人は現実には密着した誠実な生き方をしている。それは、彼女が所有する飾り気の無い黒々とした家具の様である。彼女は、使用人のパットと並んで現実世界に根を下ろした生活を送る人物であり、それゆえ‘strong character’を持っている<sup>15)</sup>。リンダと共に幻想的な月の光の中でアロエを眺める場面では、娘と気持ちを共有しているかの様だが、実は微妙に違う。会話の最後にリンダが両手を母に差し出したのは、ク

マツツラの花の香りだけでなく、アロエを前にした気持ちの高ぶりを伝えたいと思ったからであろうが、「いい匂いね」という感想に続けて夫人の口から出た言葉は、「手が冷たくなっているわ。家へ戻りましょう」という大変現実的なものだった。更に、アロエを前にして何を考えていたのかリンダに聞かれて、「新しい土地の果樹園や菜園からの収穫でジャムを沢山作って食料品店の棚に沢山並べたい」という気持ちを述べる。地に足のついた生き方、生きているということを形に残すことに喜びを感じる姿勢は、家族の生活の切り盛りをするということに通じる。それに引き換え、リンダは、出産に代表される「形に残すこと」を恐れる。しかし、「生きていたいという気遣いじみた執念」に従い、人生の辛さ、人間の持つ様々な面を知った上で、それでも生きたいと考える彼女こそ、実は「生」の本質を突いているのかも知れない。

フェアフィールド夫人の第四番目の特徴は、細やかな心遣いが感じられることである。引越しの馬車に乗せてもらえず隣家のサミュエル・ジョーゼフス夫人 (Mrs. Samuel Josephs) の元に、迎えに来るまで一時、残されるキザイアとロッティに、「…したくなったら忘れずにサミュエル・ジョーゼフスさんにそう言うんですよ」と指示し、夫人にはお礼を言い、子供達にもお礼を言わせ、本来なら母親がすべきことをこの祖母は総てこなす。『アロエ』では、この役を母親リンダがしていたのだが、マンスフィールドは、祖母の存在感と、一家のまとめ役としての印象を更に強める為に、こう書き直したのであろう。娘婿の「…して下さい」という遠慮無い依頼にも総て 'Yes, Stanley.' と言いつつ応えている。そして、彼女の城ともいべき台所は、引越し直後と思えぬ程に片付いて、リンダが指摘するように、「何でも2つ1組」に揃っている。そのうちの1組は、ベリルが気に入らないと言いながら台所に持ち込んだ絵画2枚であるが、それすらもフェアフィールド夫人に埃を払ってもらおうと、所を得たように落ち着く。

家族の中でも似た者同士2人1組になっている中で、精神的につながるパートナーがいなのはリンダだけであろう。夫への嫌悪と尊敬の狭間で疎外感を感じ、精神的に1人ぼっちの感は拭えない。とは言え、実はリンダに似た性質の人物がいる。それは、祖母と強くつながっているはずのキザイアである。見方を変え、母リンダと次女キザイアの共通点が多いことに気づく。まず、2人とも飛び掛かって来るものが嫌いである。キザイアの場合は、犬、オウム、らくだが嫌いで、「私の方に向かって来る間にその顔がとっても大きく膨らむの」と言う。それは、リンダが夫をニューファンドランド犬に譬え、彼女の幻想の世界で、小さな鳥の雛が段々大きくなって（夫との関係から生まれる）赤ん坊の姿へと「膨らむ」とことと似ている。キザイアが「男の子達が嫌い」と言うのも母親に通じるものがある。家の中の物が作る「秘密結社」(THEY) がリンダを怯えさせ、彼女に付きまとい、何かを彼女から欲しがっていると妄想させる様子と、引越して空になった家の中で感じる不気味な 'IT' の存在にキザイアが怯える様子もまた、作者によって入念に呼応させられていると言える。また、姉の

イザベルにどこに行くのか聞かれても「ちょっとそこまで」とかわして、一人で果樹園から草地、庭へと探検するキザイアは、時々庭で1人過ごすリンダにどこことなく似ている。

アロエについてこの母娘が話す場面も、2人の共通点を示唆していると言えるだろう。しかしここで、「花が咲くことがあるの?」との娘の質問は、あくまで「実り」への興味を示しており、アロエを逃避の手段とみる母親のものと異なり、どちらかと言えば、すぐに蕾の存在を指摘した祖母への類似が感じられる。そして、'often lovely and cruel, offering for long periods nothing but "years of darkness", yet it also holds within itself the possibility of that rare flowering which justifies existence, 'which, after all, we live for'<sup>16)</sup> というアロエの特質は、人生そのものを表わしている。キザイアには、母と祖母の両方の性質と、それを元に人生の複雑さに気付く洞察力が示唆されており、それらの融合がさらに深みのあるキザイアの人間形成につながっているとも言える。これら2つの性質は、鉄の門から玄関の方に向かう正反対の外観をもつ2本の道に象徴されている。

On one side they all led into a tangle of tall dark trees and strange bushes with flat velvet leaves and feathery cream flowers that buzzed with flies when you shook them—this was the frightening side, and no garden at all. The little paths here were wet and clayey with tree roots spanned across them like the marks of big fowls' feet.

But on the other side of the drive there was a high box border and the paths had box edges and all of them led into a deeper and deeper tangle of flowers. The camellias were in bloom, white and crimson and pink and white striped with flashing leaves. You could not see a leaf on the syringe bushes for the white clusters. The roses were in flower.... (p. 239)

全体像から見ると、フェアフィールド夫人は、豊かさや温かさの象徴の様な人物である。着ている洋服には、大きな紫のパンジーの花の模様がついていて、命の象徴の様である。また、彼女が身に着けている 'a silver crescent moon with five little owls seated on it' と 'a watchguard made of black beads' (p. 236) は、月、ふくろう、黒いビーズの鎖といった「魔女の様な」<sup>17)</sup> 不思議な力を表わすものでもある。庭のぶどう木からの連想で、ベリルが赤ちゃんの時に大きな蟻に足を刺された時の、言わば楽しいエピソードを思い出しているが、そうした弱りを吹き飛ばすパワーを持つのが、魔女を思わせるアクセサリなのかも知れない。実際、マンスフィールドの日記の中の幼い日の思い出にも、'the silver brooch that was a half-moon with five little owls sitting on it'<sup>18)</sup> を祖母が身に付けていたという記述がある。

こうして、三世代の関わりを描くことによって、祖母と孫の交流だけでなく、一層の存在感や臨場感を持つ祖母の



人物像を、作者マンスフィールドが描こうとしていると言える。4年後に書かれる「入り江にて」では、背景が同じ家族構成に、更にビップとラッグズの父親ジョナサン・トラウト (Jonathan Trout)、ロッティの下に生まれた男の子が加わる。

## V. 「入り江にて」(1921)

この物語へのマンスフィールドの思い入れは、ドロシー・ブレット (Dorothy BRET) への 1921 年 9 月の手紙に見られる。

I've just finished my new book. ... It is as good as I can do, and all my heart and soul is in it... every single bit. Oh God, I hope it gives pleasure to someone.... It is so strange to bring the dead to life again. There's my Grandmother, back in her chair with her pink knitting. ... And then the place where it all happens. I have tried to make it as familiar to 'you' as it is to me<sup>19)</sup>.

この話に初めて登場するジョナサンは、「前奏曲」で 1 人疎外感を感じ、心のパートナーがいなかったリンダの良き理解者となる。彼は自分を、部屋に飛び込んで出口がわからず、ガラスにぶつかったりして逃げ出せない虫に譬え、この生活を変えたいが、その気概が無く、自分は弱いのだとリンダに語る。

「入り江にて」でも、フェアフィールド夫人は相変わらず一家の中心となって家族の世話をしている。朝、時計を見ては、出掛けるまで 25 分しか無いとか、馬車が来るまで 10 分半しか無いと慌てるスタンリーに、彼女は落ち着いて対応している。子供達の世話をし、彼女等に父親への朝の挨拶を促し、朝食の手伝いをさせ、今もなお病気がちな自分の娘リンダの世話をしている。そして、キザイアは成長と共にますます祖母に似て人情味が厚くなり、行動範囲が広がったロッティの世話をする姿が微笑ましい。長女イザベルは、末っ子のロッティがいつも自分につきまとうことを嫌がり、次女のキザイアに、ロッティを相手にしないようにと釘を刺し、そうすれば褒美をあげるなどと意地悪なことを言うのだが、キザイアはそれを軽く聞き流し、木の柵を越えられないロッティの為に (イザベルの指示に逆らって) 戻って行き、手を貸す。また、従兄弟達も加わって皆で動物ゲームをする時に、やり方がよくわからず、自分が何の動物になったかも忘れてしまうロッティに気遣いを見せるのもキザイアである。「前奏曲」では、母親との類似点も多く見られ、玄関に通じる 2 つに分かれた道が象徴するように、母と祖母の両方の気質が彼女の中にあっただが、ここへ来て、段々祖母の影響の方が大きくなっていることが明らかになる。

「前奏曲」では、台所がきれいになったと満足感を表わしていたフェアフィールド夫人であったが、今作では、「気持ちのいい朝」という表現に見られるように、家族全員の幸福や一家の生活全般に安堵の念と満足感を抱いている様子が描かれている。

"Splendid! He [the baby] woke up once last night.

What a perfect morning!" The old woman paused, her hand on the loaf of bread, to gaze out of the open door into the garden. The sea sounded. Through the wide open window streamed the sun on to the yellow varnished walls and bare floor. Everything on the table flashed and glittered. In the middle there was an old salad bowl filled with yellow and red nasturtiums. She smiled, and a look of deep content shone in her eyes. (p. 269)

杖が無いのは家族の誰かの仕業だと腹を立てながら、慌しくスタンリーが出掛けた後の、女性達の解放感は、「お互いに言葉をかける彼女等の声までが違ったものになる。温かく優しく響いて一つの秘密を分け合っているかの様である」(p. 270) と表現されている。そして、フェアフィールド夫人までもが、一番下の男の赤ちゃんを抱いて「行ってしまった?」と嬉しそうである。一緒に住む期間が長くなったからか、スタンリーへの気兼ねが少しずつ薄れている様でもある。海岸で泳ぐ孫達の世話をしているフェアフィールド夫人に、娘ベリルがアクセサリを預けて「ケンパー夫人 (Mrs. Kember) と泳ぐわ」と言った時には、この夫人のことを母親はよく思っていないという気持ちがベリルにも理解できている。寛大な理想の祖母像として描かれるフェアフィールド夫人にも、自分の感情や好みや曲げられない気持ちがあるとわかり、人間的で親しみを感じさせ、実在感を覚えさせる。

「前奏曲」のアヒルのエピソードと並んで、キザイアが「死の問題」について考える場面がある。祖母が編み物の手を止めて、何か思案している姿に気づいたキザイアが、その仕草の理由を尋ねる。部屋には、針皿と懐中時計をしまっておくのに都合がいいとキザイアが祖母にプレゼントした貝殻が飾ってあるが、貝殻にしまわれた秘密が明かされるかの様に、祖母の心の中が明かされる。祖母は、鉱山で日射病にかかり亡くなった、キザイアのおじのことをぼつぼつと話し出す。そして、「いつかは皆死ぬのよ」と語る。人生はそういうもので、過去を振り返って悲しんだりするものではないという祖母の言葉は、「船旅」の祖母の言葉を思い出させる。しかし、同じ頃書かれたこちらの作品では、「死んじやいや、死んじやいや」と言うキザイアにくすぐられた祖母がくすぐり返しているうちに、祖母と孫の 2 人共、何が原因でくすぐり始めたのか忘れてしまう。まるで、アヒルの首が切られた時に、「首を元に戻して」と使用人のパットにむしゃぶりついて行ったキザイアが、抱き上げられて彼のイヤリングが目に入った途端に関心がイヤリングに向けられるのに似ている。マンスフィールドは、「死の問題」を扱う際、教訓としてではなく、理由など関係なくそのまま受け入れるしかない運命であると言いたかったのであろう。その意味で、作品中で「現実世界を代表する」フェアフィールド夫人とパットの 2 人が「死の問題」についてキザイアに考えさせる役割を担うのは必ずしも偶然ではない。そして、いつも祖母は毛糸の編み物をしている。海岸で孫達が泳いでいる間もそうである。この場面でも、「編み物を拾って頂戴」と言って、またすぐに日常の生

活に戻ろうとするが、それまでやっていた様に、また3つずつ編み目を数えて編み物を続ける様子は、祖母が人生をそのまま刻んでいく姿と重なる。

デイヴィッド・デイシェス (David Daiches) によれば、マンスフィールドの「経験」に対する姿勢は、「非常に限られた1つの状況における人間の行動を捉え、象徴を用いて含蓄を潜ませることにより、一般論の介入無しに‘universal aspects’ (真実) を作品に浮かび上がらせる」というものであるが<sup>20)</sup>、正にこれらの作品における家族の営みに彼女は真理を「展開」していると言えるだろう。研ぎ澄まされた自らの感覚で人間の日々の活動を観察し、そこに見出す真実を、一点の曇りも無い完璧な表現で作品に仕上げるのが、自分がこの世に生きていた証になると彼女は確信したのである。自らの死期を意識し始めた1921年には殊更にその感情がよぎったに違いない。執筆中、彼女は「私は水晶の様に透明になることが出来ません…。」<sup>21)</sup>「神様！あなたの光が刺し通すよう、水晶の様に透明にして下さい」<sup>22)</sup>という感情を日記に記している。

## VI. 終わりに

マンスフィールドは、ニュージーランドものの中で、懐かしい故郷の家族の思い出をひたすら描いた。レイチェル・マカルバイン (Rachel McAlpine) は、マンスフィールドのニュージーランドものの楽しみを‘that sense of a whole community of family’ であるとし、彼女の作品の元となった家族への鋭い観察は、大家族の中の「一番上でも一番下でもない女の子」という立場でこそできるものだったと指摘している<sup>23)</sup>。家族それぞれが個人の問題や感情を抱え、それでも、否、それだからこそ生き生きと懐かしさの中で息づいている。そこでは、家族は‘positive and warm and stable’<sup>24)</sup>に描かれている。

Relationships are not simple, but they are always there, solid and loving. [Mansfield has] written about [her] childhood as interesting, busy, safe, and sometimes comical experiences<sup>25)</sup>.

1912年に書かれた「新しい服」に登場する祖母は、孫を庇うが、その動機が、娘夫婦の子育てへの対抗とも見え、孫の方も、祖母に心を開いて何かを打ち明けるということが無く、2人の心の結び付きはかなり弱い。また、1920年の「パーカーおばあさんの生涯」では、孫があまりにも病弱である為、祖母と孫との多くの交流は望めなかった。そして、孫の母親の存在感も薄く、家族の物語と言うよりも、辛く悲しい人生を送ってきた1人の老女の物語といった印象を強く与えてしまう。

次に1921年の「船旅」は、母親のいない少女と祖母の密なるコミュニケーションが船旅という舞台で繰り広げられるという意味で、前作2つとは異なる。母を失った少女と、息子の嫁を失ったその祖母が悲しみを乗り越えて共に暮らす新しい生活に向けて、船出する。亡くなった母親に代わって、祖母は孫に、自分の経験に基づき、それとなく人生を教えようとする。

様々な家族メンバーとの触れ合いの中で、一番複雑で厚

みのある祖母像が窺えるのは、1917年の「前奏曲」と1921年の「入り江にて」においてであろう。ケイト・フルブルック (Kate Fullbrook) によると、‘Mrs. Fairfield is the apotheosis of all of Katherine Mansfield’s grandmothers’<sup>26)</sup>である。孫を守る祖母としてだけでなく、母親として病弱な娘を支え、自分の独身の娘を見守り、義理の息子の世話をし、各々個性を持つ家族の求心力として、無くてはならない存在である。しかし、「船旅」の祖母の様に教育者としての面を見せるのではなく、家族の支えになることに生き甲斐を感じている様である。「前奏曲」から更に進んで「入り江にて」になると、良き母・祖母のイメージに1人の人間としての面白みが加わってくる。そして、親族の若き死を心の中で消化し、前を向いて生きる姿勢が自然に語られる。

祖母のイメージは作品毎に趣が違いますが、ニュージーランドものの代表と言える「前奏曲」と「入り江にて」の2作品において、とりわけ豊かにイメージが膨らみ、マンスフィールドの思い出の中の祖母が見事に甦ったと言える。そして、祖母を扱うどの作品にも共通して見られるのは、燈台の役割を果たしている祖母のイメージである。異国イギリスで、孤独な放浪者 (exile) として故郷を見つめる彼女の潜在意識の中で、遠い思い出の中の祖母の姿が、様々な形で光を投げかけていたと考えられる。

作者マンスフィールドの独創性は、登場するどの人々の心の波をも、周囲の仔細な日常の風物や人物や出来事に投影、もしくは象徴させていること、或いは、登場人物の情緒の流れと周囲の出来事の流れとを相関させていることにあるのだろう。多感な子供時代の感情や、人生の重荷に人知れずひたすら耐え、生きながらえている人々の姿を、彼女ほど何気ない筆致で描き出した作家は稀である。彼女はそれを「物語る」のではなく、一枚の絵の様に描き、示した。それは、時間的推移と共に事件が展開するのを作者が物語る従来のものと違い、日常の出来事が「ありのままに」示されるという新しい手法によった。

病に苦しむ孤独の中で、時間的にも距離的にも遥か遠く離れたニュージーランドの思い出が次々甦り、感情が感情を呼び、そこはかたなく漂う人生への想いや抒情性を帯びた一連の感情が浮かび上がり作品になる。言葉を換えると、マンスフィールドの作品は明らかに抒情性を追求している。そして彼女は、研ぎ澄まされた感覚で、対象をあるがままに見て感受し、諦観し、それらを完璧なまでに表現しようとした。それを可能にしたのは、死期を意識した彼女が残り少ない限られた時間に、不慮の事故で若死にした弟の為、また、家族への心からの感謝を込めて、どうしても故郷ニュージーランドの思い出を記したいという責任感と使命感、つまり、故郷を想う強い情熱であろう。それは丁度、彼女が両親の反対を押し切り、英国にやって来た時に懐いていた情熱と呼応している。19歳の時、故郷を捨て、夢にまで見たロンドンにやって来た彼女は、その後、ひたすら故郷ニュージーランドに想いを馳せることとなる。これこそ運命の悪戯と言えよう。それら悲壮な使命感を帯びた情熱と、表現する知性の双方が彼女の作品には結



晶していると言える。

#### テキスト

Katherine MANSFIELD, *The Short Stories of Katherine Mansfield* (New York : The Ecco Press, 1983).

ページ数のみ示されている引用はここからのものである。

#### 注

- 1) Katherine MANSFIELD, *Journal of Katherine Mansfield*, ed. by J. Middleton MURRY (*The Works of Katherine Mansfield* Vol. X) (東京 : 本の友社, 1990), pp. 93-4. (Journal : January 22nd, 1916)
- 2) Katherine MANSFIELD, op. cit., p. 43.
- 3) Katherine MANSFIELD, op. cit., p. 98.
- 4) Sylvia BERKMAN, *Katherine Mansfield* (New Haven : Yale University Press, 1951), p. 88.
- 5) Ian A. GORDON, *Katherine Mansfield* (London : Longmans, Green & Co., 1954), p. 7.
- 6) Ian A. GORDON, op. cit., p. 16.
- 7) Clare HANSON and Andrew GURR, *Katherine Mansfield* (London : The Macmillan Press Ltd., 1981), p. 16.
- 8) Anthony ALPERS, *The Life of Katherine Mansfield* (New York : The Viking Press, 1980), p. 9.
- 9) Kate FULLBROOK, *Katherine Mansfield* (Sussex : The Harvester Press Ltd., 1986), p. 44.
- 10) Kate FULLBROOK, op. cit., p. 10.
- 11) Clare HANSON and Andrew GURR, op. cit., p. 98.
- 12) Marvin MAGALANER, *The Fiction of Katherine Mansfield* (Carbondale : Southern Illinois University Press, 1971), p. 32.
- 13) 松原知子, 「マンスフィールドの短編小説にみる老女のイメージ」—『英知大学論叢サピエンチア』32号 (英知大学, 1998年2月), pp. 167-181.
- 14) Diane E. MCGEE, *Writing the Meal : Dinner in the Fiction of Early Twentieth-Century Women Writers* (Toronto : University of Toronto Press Inc., 2001), p. 114.
- 15) Marvin MAGALANER, op. cit., p. 37.
- 16) Clare HANSON and Andrew GURR, op. cit., p. 52.
- 17) Kate FULLBROOK, op. cit., p. 72.
- 18) Katherine MANSFIELD, op. cit., p. 102. (Journal : February 17th, 1916)
- 19) Katherine MANSFIELD, *The Letters of Katherine Mansfield* Vol. II, ed. by J. Middleton Murry (*The Works of Katherine Mansfield* Vol. XII) (東京 : 本の友社, 1990), p. 134.
- 20) David DAICHES, *The Novel and the Modern World* (Chicago : The University of Chicago Press, 1939), p. 75.
- 21) Katherine MANSFIELD, op. cit., p. 255. (Journal : July 13th, 1921)
- 22) Katherine MANSFIELD, op. cit., p. 271. (Journal : November 21st, 1921)
- 23) Rachel McALPINE, *Reading about New Zealand—Three Lectures about New Zealand Literature* (Wellington : Elliot, 1991), p. 33.
- 24) Rachel McALPINE, op. cit., p. 41.
- 25) Rachel McALPINE, op. cit., p. 41.
- 26) Kate FULLBROOK, op. cit., p. 68.

# Katherine Mansfield's Sentiments toward Home

—The Image of Grandmother in a Series of New Zealand Stories—

By

Akiko TERAMOTO\*

(Received May 23, 2008/Accepted September 2, 2008)

**Summary :** Katherine MANSFIELD (1888–1923) left New Zealand, her motherland, when she was nineteen years old, and she never returned there in her life. She rejected the country, eager to become a novelist in England. Meeting again with her brother, who came to see her before serving the military, however, she was reminded of her happy childhood in New Zealand. When he died of an accident during wartime training, she thought it her duty to write about the native country. The short stories prompted by such an incentive are what we call 'New Zealand Stories'.

In MANSFIELD's works, there are some treating the relationships between grandmother and grandchildren. It is well known from her diary and biography that MANSFIELD loved her grandmother, and the fact seems to be reflected in those stories. The Burnell family structure in her stories is found to bear some similarity to that of the BEAUCHAMPS. (Katherine MANSFIELD is a pen name of Kathleen Mansfield BEAUCHAMP, who is one of the daughters of the BEAUCHAMPS.) Each member of the Burnells reminds us of Katherine MANSFIELD herself as a young girl, her grandmother, father, mother, and sister. Her uncle, aunt and cousins also appear in the stories and keep company with the Burnells. And we find ourselves faced with her keen insight not just into human relationships but into human nature in her works.

Each grandmother in MANSFIELD's works appears to be somewhat different, according to the relationships with the grandchildren, but all the grandmothers are warm-hearted women. I will scrutinize the grandmothers, following the three stages, that is, (1) 'New Dresses' (2) 'The Voyage' (3) 'Prelude' and 'At the Bay', and analyze the similarities and differences among them.

**Key words :** New Zealand Stories, family, grandmother, solitude, lyricism

---

\* Foreign language studies(English), Faculty of Applied Bio-Science, Tokyo University of Agriculture